

# 帰らないで・・・

－「盛り上がり」≠「継続」－



【帰らないで…】5月15日（日）の午後、モビリア避難所には「タッキー」こと、滝沢秀明が来る被災地支援のイベントが組まれていました。先週の訪問時には聞かされていなかったから、急に決まったことなのでしょう。その話を聞いて、子どもたちの支援をしているすたんどばいみーの子どもたちは、「日曜日の支援活動は、難しいかも…」という予想をたてていました。しかし、この予想は意外にも外れたのです。もうすぐタッキーが来るであろう時間の少し前に出発しようとするすたんどばいみーの学生に「帰らないで…」「アンディ（ベトナム人の高校2年生）は、おいてって」などとせがみ、そんなやりとりが出発前の10分ほど続きました。



子ども支援をしているすたんどばいみーからの報告によれば、前回の支援から、子どもたちの様子に変化したと言います。その前までは、活動の始まりが「今日は誰が来たのか」という自己紹介から始まっていたそうですが、前回からは「来週は誰が来るのか」をまず聞くようになったというのです。「すたんどばいみーは、来週も来るのか」、そんなことを子どもたちは何気なく聞いているのだろうかと思ってしまう。

GW後半からボランティアが激減しているということが、大々的に報道されていました。支援隊の感覚としても、高速道路の混雑具合から、それを感じたりします。時間の経過とともに「忘れられてしまうこと」への不安が生まれてくるのは、当然だと思います。瓦礫は、少しずつ片付けられて、山のように積み上げられてはいるものの、一方に、2ヶ月たってもほとんど手が着いていないように見えるところもたくさんあります。しかし、不安はそれだけではないのです。

2ヶ月という時を経て、被災した人々の選択も多様になってきています。仮設住宅の入居に伴い、避難所を離れる人も見え始めました。また、故郷を離れることを選択する人もいます。そうした中で、避難所の子どもたちの数は確実に減っているのです。それは悪いことではないし、むしろ、復興の兆しと言えるものです。しかし、被災当時のあの苦しい状況とともに乗り越えた人たちの関係が途切れることに、不安がないわけではないのです。避難所を後にする者にも不安があります。「ここから離れてうまくいくのか」と。そして、選択の余地がなく避難所に残される人々。そこにも不安があります。「自分たちは、この生活に取り残されるのではないのか」と。

「復興」という言葉は、私たちに力強く響きます。しかし、被災地の人々にとって「不安」と切り離せないものなのだと知る必要があると思います。

【残された者たちの声】支援の期間が長くなることで、震災に関わるいろいろな声を聞くことも多くなりました。1回の訪問では聞くことのできない「声」ではあり

ますが、そうであるからこそ、一つひとつの「声」は重たく感じます。

モビリア避難所の小学4年生の子は、中学生の兄を津波で亡くしていました。しかし、先週、朝5:30にテントに入ってきて、いろいろ話しているうちに、祖父を震災後亡くしていることを話し出したのです。祖父が津波が心配された時にどんな行動をとったのか。その後、家族と再開するまでに丸一日かかったこと。避難所での生活の二日目に風邪を引き、それをきっかけに、2階だけ残った自宅での生活を始め、それから数日して亡くなった、というお話でした。なぜ、その話をしたのかは、よくわかりません。ただ、学校が始まり、津波ではないけど亡くなったことを説明する機会を経験し、誰かに話したことで、話しうる事柄として言葉に整理されたのだろうと想像できました。家族を失うのは、津波だけではなくたのです。

今週は、学校に教材をおろしている業者（山十、金野さん）のお手伝いも始まり、ここでも、津波の時のことを聞かせてもらえたそうです。山十さんの倉庫には、3月ということもあって、新年度に配布する教科書が配本されてましたが、社長さんたちはそれが流れることを心配して、シャッターを閉めに戻ったところ津波にあったのだそうです。残された従業員である金野さんは、「社長の意志をついで、自分が仕事をやっていたのか」と自問自答する毎日なのだそうです。津波、そして、それに伴う出来事は、誰を恨むものでもないだけに、残された人たちは、残された者の責任を引き受けていることを、あらためて知ることが多くなっています。

## 【宮城県石巻市万石浦中学校避難所の子ども学習支援】

ちょっとしたきっかけで、万石浦中学校避難所を訪れたこと、そこで神奈川県から派遣されている職員の岸岡さんより子どもの学習環境の窮状が訴えられたことは、前号に記した通りです。今回の支援活動は、そこで学習支援を実行していくための事前打ち合わせも行ってきました。陸前高田市より南下すること100km、そこに石巻市はあります。



南下100km。復旧している三陸道を部分的に使って、およそ2時間の行程でした。途中には、町が焼けたことで知られる気仙沼市もあります。そこでみたのは、陸前高田市とは違い、津波のあとの火災で焼けた車の塗料がはげ、塩水に浸かって錆びたため、瓦礫は真っ茶色という光景でした。加えて、瓦礫の山には「5月12日捜索OK」といったつい最近の日付がスプレーで書かれた看板があり、捜索活動の遅れ／難しさを感じる状況を見ることもなりました。100kmにわたる災害の状況を目の当たりにし、それが400kmも続くこと、加えて原子力発電所の問題が加わっていることを考え合わせると、「まだまだ」を

確認しないわけにはいかない行程でした。

石巻市は、写真のように、地盤が下がった影響なのか、旧北上側の水位は高く、水の流れは下流から上流に向かっていている様子で、大雨にでもなれば、すぐに堤防が決壊してしまうのではないかと思います。

万石浦中学校避難所では、支援に入っている神奈川県職員の方は、岸岡さんから反町さんになっていきましたが、私たちの行政のイメージを覆すほどに、連絡や調整がうまく行われており、私たち支援隊との役割分担の調整はスムーズに行えました。早速、第1回目を21日(土)に、小学生支援(14時～16時)、中高生支援(17時～19時)、場所は中学校の教室(1階1室)、ボランティア滞在時間(13時～20時)という骨格が決まりました。21日は、多くのボランティアを入れて、子どもたちの生活や学習状況を把握し、ニーズをつかむことから始めます。



**【違和感】** 支援活動を始めておよそ1ヶ月半。戸惑いながらの支援活動でしたが、それでも状況にあわせて臨機応変に対応し、多様なニーズを集め、それを実際の支援へと形にすることが、完全とは言えないまでも、ある程度の成果をおさめてきていると思います。そして、これから始まる宮城県での新たな支援。しかし、その一方で、この支援活動が回り始めるほど、支援隊の核となる者の日常は忙しくなっています。もちろん、覚悟をもって始めたことですから、その忙しさに不平も不満もありません。

ただ「違和感」として残るのは、マスコミなどを通じて流れてくる「普段の生活をきちんとすることが大事」というメッセージです。7回にわたる支援の経験から考えても、「普段の生活をきちんとしたからといって、現在やっている支援活動などできない」のです。金銭的にも体力的にも精神的にも、3月11日前の「普段の生活」に私たちが戻ったとしたら、今の支援などでき得ないのです。「頑張れ(頑張ろう)！日本」にも違和感がありますが、「普段の生活をきちんとすることが大事」にも違和感があります。なぜなら、「普段の生活が大事」という言葉を穿って考えれば、「普段の消費が大事」と言っているだけでしかないからです。「震災でもうけよう」とするムードさえ見られるようになった現在、こうした言葉にさえ違和感を覚えてしまうのです。ちょっと離れた彼の地では、時計があの時で止まったかのような生活となっているにもかかわらず…。支援活動を重ねれば重ねるほど、この乖離への「違和感」は大きくなるばかりです。

**【日本財団助成金100万円決定】** 5月13日(金)に、日本財団より東日本大震災支援として100万円の助成が決定した旨の連絡が、事務局にありました。大変うれしいことです。この支援金にて、美術教材(絵の具セット、個人支払教材1800円)を、小友中学校と広田中学校の全生徒(36セット+87セット)の購入を決めました。

仕入れ先は、陸前高田市の三上教材社です。津波で店舗が流され、矢作にある自宅も被害を受けられているようですが、自宅の庭にブルーシートを広げての仕分けをするような形での営業再開だそうです。今回の助成金は、子どもをもつ被災者家族からの教材

代金の集金を抑えること、地元の教材社を使って物資が流通するような支援に使っていきけるようにしていきたいと考えております。

### 【今後の支援の予定】 5月17日現在

- 5月20日(金)～5月22日(日)の第8回支援(3部隊構成)  
金：小友・広田中の状況把握、万石浦中学校でのチラシ配布  
土：小友・広田中への支援物資搬入、モボリア避難所の子ども支援  
万石浦中学校の学習支援、教材業者支援  
日：小友中学校運動会見学、モボリア避難所子ども支援

### 【ご協力いただきたいこと】

1. ご提供いただきたい物資 ※提供できそうな物品があればご連絡ください。
2. 同行していただける方 ※参加可能な週末をお知らせください。

### 【ご協力に感謝!!】

- 今回の支援隊のメンバー(8人) 柿本隆夫(引地台中学校)、清水睦美(東京理科大学)、洲崎仁美(大和中学校)、渡辺裕子(引地台中学校)、松永雅文(大和市教育支援教室)、すたんどばいみー：宮脇英理・宮脇アンディ・馬場有希(西鶴間小学校)
- 小友小中学校 ①寄付からの買い出しによる支援：美術(図画工作)教材、保健室用具、体育教具、事務用品
- 広田小中学校 ①支援物資の提供：FAX機、②寄付からの買い出しによる支援：美術教材、掃除用具など、事務用品
- モボリア避難所 すたんどばいみーの子ども支援(3人、2日間のべ7時間)
- 山十(教材業者) 教科書仕分け作業(2人、2時間半)
- ご協力いただいたみなさま(敬称略、順不同、物資・寄付を含む) 5/6～5/13  
浅沼蓉子(Ed.ベンチャー代表)、家上とめ子、堀健志(東京理科大学)、チアナン(Ed.ベン日本語教室有志)、家上治雄(会社員)、橘春江、鈴木温子、権田和子(元中学校教諭)、伊藤稔(東京理科大学)、工藤美知子(大和中学校)、武内敏子(Ed.ベン日本語教室代表)、市村陽子(大和市教育支援教室)、櫻井千夏(歯科衛生士)

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

**NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー**

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

